

【巻頭特集】健康産業を担うケアコムグループが取り組む地域貢献

# 農業体験から広がる健康づくりの輪

2011年春、広い工場の敷地内に誕生した、株式会社ケアコムの農園部。

ナースコールの国内主要メーカーとして、医療業界を支える同グループの皆さんに、野菜づくりから広がる地域貢献への思いを聞いた。



国内のトップシェアを誇る、同社のナースコール

## 従業員向けの福利厚生から大規模な農園祭へ発展

玉村町東部工業団地内に工場を構える株式会社ケアコム。1955年に創業され、ナースコールの国内生産トップシェアを誇る、医療・福祉業界施設向けシステムメーカーだ。

同社が敷地内に農園を作ったのは、2011年。群馬工場を視察した池川充洋代表取締役社長が、社屋横に広がる手つかずの空間を見て、「この場所で野菜を育て、従業員の福利厚生に役立てよう」と発案した。

農園部の初期メンバーとして白羽の矢が立ったのは、当時部品の仕入れなどを担当していた



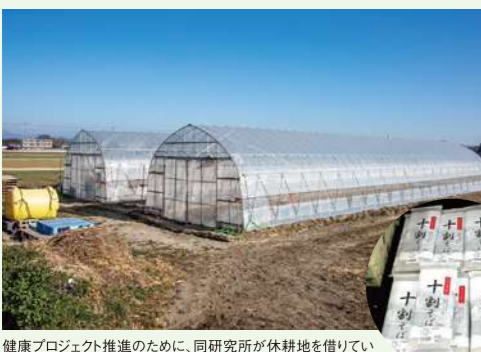
ケアコム農園部部长 大西 壮さん



株式会社ケア環境研究所 松本 忠康さん



株式会社ケアコム 群馬工場長 川島 祐治さん



健康プロジェクト推進のために、同研究所が休耕地を借りている畑。昨年一般に販売した十割蕎麦は好評を博し、完売した



ふるハートホールで行われた、群馬県立女子大学学生への食糧支援。自社で栽培した無農薬の米や野菜を寄付した



株式会社ケアコム 群馬工場  
株式会社ケア環境研究所  
玉村町箱石419-1 Tel. 0270-65-0651

松本忠康さんだ。「実家が農家のため、野菜づくりに詳しいだろうと、農園部の立ち上げを任せられた」と話す。

## 新世代へつなぐ健康プロジェクトへ発展

地元の団体や農家、企業、近隣の大学の学生ボランティアと協力し、さまざまな催しを開催してきたのである。

「皆で汗を流しながら農作業にいらしてると、従業員たちの会話が弾み、チームワークも高まりました」と、川島祐治工場長はほほ笑む。

その後、年を追うごとに畑の面積を増やし、作物の品種や量が増加。仲間たちは少しずつ、野菜づくりへの自信を深めていく。

農園部を結成して4年目の春、団体とも縁がなくなり、農園祭でのステージイベント開催へと発展した。

「多くの皆さんに楽しい時間を過ごしていただける場を提供でき、張り合いを感じています」と、農園部部长の大西 壮さんは笑顔を見せる。

わずか、8畳ほどから始まった従業員のための農園づくりからやがて、地元の恒例行事へと成長。多くの人々が集まるイベントとして、まちににぎわいをもたらしたのである。

皆で栽培した野菜を活用し、社外の人々にも楽しんでもらおうと、同社は春の農園祭 in ケアコムを企画。東京本社や関連企業、取引先企業など、県内外から人を招き、野菜の収穫体験や、野菜料理の試食会を行った。

これを機に、近隣住民にも畑を開放し、シェアファームがスタート。玉村町立第四保育所の子どもたちに向けた、ジャガイモやサツマイモの植え付け体験の実施など、農業を通して地域の人々が交流できる場所を提供した。

一方、同農園部は玉村町住民活動サポートセンター「はる」に団体登録し、地元のイベントへも積極的に参加。町内で活動するフラダンス、ウクレレ、和太鼓などの同農園部。「おかげさまで、毎回400人ほどの人が参加してくださるようになりました」と川島工場長は話す。

幅広い世代に楽しんでほしいと、その内容も創意工夫。にぎやかなステージイベントに加え、小物販売や体験型ワークショップ、電動バスの運行、ドローンでの空中撮影など、多彩な催しを行うようになっていった。

残念ながら、感染症予防に考慮して昨年の農園祭はやむを得ず中止。しかし、いつ事態が収束してもいいように、畑の世話だけは続けた。収穫した野菜は保育園や地元の団体に届け、ささやかな幸せをお福分け。「楽しみに待っていてくれる皆さんのために、今年も野菜づくりはあきらめません」

春と秋に開催される農園祭inケアコム。収穫体験やステージイベントでにぎわう



と大西さんは前を向く。

一方、農園部から発展し、新たな試みも始まっている。同社内にて拠点を構える株式会社ケア環境研究所が推進する健康プロジェクトだ。3年前、農作業の手腕が買われて同研究所に向向した松本さんは現在、工場近郊の田畑で無農薬の米や野菜の栽培を実践中。その種類は蕎麦やアスパラガス、タマネギ、大根、ホウレンソウなど、多岐にわたっている。

「実は、研究所で育てた玄米や野菜を社員に食べてもらい、体重やBMI、血糖値の変化を記録し、データをまとめていきます」と松本さん。これからも、人々の健康寿命が少しでも延びるような活動を推進したいと語ってくれた。

また、同研究所は、新型コロナウイルスの影響でアルバイト収入などが減少した群馬県立女子大学の学生を支援しようと、食料品を配布するボランティアにも協賛。地元で頑張っている若者たちを応援するのも、地域に根差す企業の使命だ。

「世界中が暗い話題に沈む厳しい時代だからこそ、野菜づくりを通して健康プロジェクトで、地域貢献に寄与していきたいですね」と、川島工場長は意気込む。

農業体験から広がった、次世代へつなぐ健康支援の輪。人々の笑顔が再び、農園に集まる日を心待ちにしたい。